

『選択集』の構造について

— 偏依善導一師 —

林 田 康 順

一、はじめに

『選択本願念仏集』（以下、『選択集』）において法然上人は、弥陀・釈迦・諸仏三仏同心からなる本願称名念仏の選択に基づく浄土宗義を体系化すると共に、阿弥陀仏の化身たる善導大師（以下、祖師の尊称略）ただ一師に偏に帰依することを明かされた。

現在までに筆者は、種々の拙稿において念仏と諸行の選択・取り・選り捨ての主体を機辺から仏辺へ、つまり我々凡夫の側から弥陀・釈迦・諸仏という覚者・如来へと転換・昇華された画期的な選択思想に注目し、さまざまな視点から以下のような結論を導き出している。まず、これまで選択思想の端緒とされてきた東大寺講説「三部経釈」に説かれる「選択・選択・選捨・選定」の使用例の検討、及び、「三部経釈」全体を通じてオリジナルな意味での選択思想が見出せないことから、「三部経釈」時点では選択思想そのものが成立していない

かつた蓋然性が高いと指摘した⁽¹⁾。また、いわゆる教義書と呼ばれる法然の著作を追い、諸師が善導を補助するという「三部経釈」時点までの説示から、諸師を退け善導一師に偏依するという『選択集』での説示への移行を明らかにし、それは善導弥陀化身説の成立と一致すると指摘した。そして、仏説に裏付けられた本願念仏の「選択」と弥陀化身たる善導への「偏依」が密接不可分の関係であり、法然が『選択集』において八種選択に続けて善導弥陀化身説に基づく偏依善導一師論を展開する意図は、浄土三部経の所説と善導の著作との有機的統合からなる『選択集』の所説が決して虚しいものではないことを伝えようとしたからであると指摘した⁽²⁾。

本稿は、こうした所論をさらに深めるべく、善導弥陀化身説に基づいた偏依善導一師論を根本に据え、機辺と仏辺、帰納と演繹という視点を通じ、法然の主著であり、浄土宗第一の宗典である『選択集』の教理構造を説明せんとするものである。

二、『選択集』の教理構造——機辺と仏辺——

1、『選択集』各章の篇目の性格について

本節では、『選択集』の中、特に各章の篇目と引文に注目し、法然がどのような意図で『選択集』を構成されたのかについて考察をめぐらせたい。その意図するところは次のような点にある。つまり、例えば『選択集』第一章であれば「聖道浄土二門篇」（『選択伝弘決疑鈔』浄全七・一九〇b）、「聖道浄土章」（『選択蜜要決』正蔵八三・三三二b）など、それぞれの該博な修学を背景にした祖師方が、該当章の内容をより分かり易く、あるいは、簡明に伝えるために、もつとも相応しい名称を本来の篇目に加える形で施されてきた。そして、私ども末学の徒は、そうした名称を道標としてこれまで学んできた。しかし、撰者である法然ご自身が「道綽禪師、聖道浄土の二門を立てて、しかも聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文」（浄土宗聖典三・九七）という篇目を付されたこともまた厳然たる事実である。そして、そこには「道綽禪師」という該当章の主格がはっきりと明示されている。あるいは、浄土宗学において『選択集』理解のもつとも権威ある註釈書である『選択伝弘決疑鈔』において良忠は、第三章や第八章・第九章に対し、「念仏往生本願篇」（浄全七・二三〇b）、「三心篇」（同七・二六六a）、「四修法篇」（同七・二九五b）といった名称

を加えている。もちろん、これ以上簡潔明瞭に該当章の内容を提示することは不可能であろう。しかし、こうした章においても法然は「弥陀如来、余行を以て往生の本願とせず、ただ念仏を以て往生の本願と為たまえるの文」（浄土宗聖典三・一一三）、「念仏の行者、必ず三心を具足すべきの文」（同三・一三九）、「念仏の行者、四修の法を行用すべきの文」（同三・一五四）という篇目を付し、本願を発されたのが「弥陀如来」であり、三心を具え、四修を勤める者が「念仏の行者」であることを、それぞれの該当章において明示されている。筆者があらためてこうした点を指摘するのは、他でもない法然ご自身が該当章の主格が誰であるのかを明白にされたかったのではないかと推察するからである。

また、篇目に続く引文の重要性については、今さら指摘するまでもないが、以上のような性格をもった篇目と引文とを相関させて再考することによって、『選択集』の教理構造を見出すことができると考えられる。そこで以下、『選択集』一部十六章を篇目の説示に注目しつつ大きく機辺と仏辺の二つに分け、とりわけ、機辺に分類される章については、帰納的性情を有する章と演繹的性情を有する章との二つに分けて順次考察を加えてみたい。

2、機辺の構造

① 帰納的構造

本節で論じる機辺とは、凡夫の側からのアプローチを指している。また帰納的構造とは、八万四千の法門から、称名念仏一行へと収斂される過程を指している。こうした過程に含まれるのは第一章と第二章の二章であり、以下、各章の篇目と引文を中心にその構造について一瞥したい。

そもそも『選択集』第一章の篇目は、先にも言及したように「道綽禪師、聖道浄土の二門を立てて、しかも聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文」であり、道綽が主格に位置づけられ、その主著『安樂集』からの引文に基づいて、「理深く、解微なる」（同三・一〇二）などという理由で聖道門を捨て、浄土門に入るべしという内容である。本章において法然は、曇鸞が『往生論註』において龍樹の説示を受けて提示する難行・易行二道判や基が『西方要決』において提示する三乗・浄土判などを例示し、智顛や迦才の所説と共に、これらすべての教判が道綽の聖道・浄土二門判と同趣旨であると言及している。道綽をはじめ曇鸞・迦才・基・智顛等は、それぞれが高徳の祖師であることは今さら指摘するまでもない。しかし、詳細は後述するが、その祖師方でさえ、善導のように弥陀化身ではなく、どこまでも凡夫の立場に留まっていると法

然は捉えている。つまり、全体を通して本章が機辺の立場から論じられていることが分かるのである。だからこそ本章の結論として法然は、「たとい先に聖道門を学せる人といえども、もし浄土門において、その志有らば、すべからく聖道を棄てて、浄土に帰すべし。例せば、彼の曇鸞法師は四論の講説を捨てて、一向に浄土に帰し、道綽禪師は涅槃の広業を聞いて、偏に西方の行を弘めしがごとし。上古の賢哲なお以てかくのごとし。末代の愚魯、むしろこれに遵わざらんや」（同三・一〇三）と述べられ、浄土五祖の第一・第二の祖師である曇鸞や道綽でさえ、聖道門を捨てて浄土門に帰入されたのだから、私たち末学の徒がこれに遵わないわけにはいかなのであろう、と結論つけておられるのである。

次に『選択集』第二章の篇目は「善導和尚、正雑二行を立てて、雑行を捨てて正行に帰するの文」（同三・一〇四）であり、善導が主格に位置づけられ、善導の『観経疏』と『往生礼讃』を引文とし、それらに基づいて五番相對・十三得失等を根拠として、雑行を抛つて五種正行に帰すべしという内容である。本章は、第一章の説示を受けて浄土門に帰入した凡夫が修める行として、極楽浄土の教主たる「阿弥陀仏におきてしたしき行」（『三心義』昭法全四五七頁）である正行を修め、反対に「阿弥陀仏におきてうとき行」（同上）である雑行を抛つべきであるという内容で、機辺の立場から論じられている

ことが分かる。詳細は後述するが、本章の篇目の主格と引文の著者である善導に対し、法然は凡夫と弥陀化身という双方の立場、すなわち、機辺と仏辺の両者を兼ね具えた立場を見出されている。だからこそ法然は、機辺と仏辺が明確に分けられる『選択集』撰述にあたり、その両者を結びつける紐帯とも言える本章において、善導の『観経疏』深心積中に語られる就行立信積のみを本来の位置から分離して配当し、機辺の立場から論じられるべき五種正行の論述だけでなく、その主格が阿弥陀仏、すなわち仏辺へと転換・昇華する正定業・助業の論述を加えて一括して取り上げる必要があったのである。そして法然は、主格が仏辺へと転じるといふ点については、次のような問答を設けてそれに対処しようとしたことが分かる。

問うて曰く、何が故ぞ、五種の中に独り称名念仏を以て、正定業と為するや。答えて曰く、彼の仏の願に順ずるが故に。意の云く、称名念仏は、これ彼の仏の本願の行なり。故にこれを修する者は、彼の仏の願に乗じて必ず往生することを得るなり。その仏の本願の義は、下に至って知るべし。（浄土宗聖典三・一〇七）

ここで法然は「その仏の本願の義は、下に至って知るべし」と述べ、説示を次章に譲っている。こうした倒置的表現がなされるのは、『選択集』一部を通じてわずかに二箇所のみである^③、とりわけこの箇所は、次章以降、主格が機辺から仏辺へ

と転換・昇華することを念頭にした表現と判断することができる。

このように『選択集』第一章と第二章、そして、それらをまとめた第十六章の私釈における惣結の文（三重の選択・略選択）の説示は、私たち凡夫にとって聖道門の教えの非現実性と私たち凡夫に唯一残された道である浄土門に帰入する以外に救われる術がないことを、そして、浄土門に帰入した私たちに唯一残された往生行としての正定業（選択本願念仏）へと至る筋道とを機辺の立場から帰納的に明らかにしたものと捉えられるのである。

②演繹的構造

本節で論じる演繹的構造とは、選択本願念仏に帰依した願往生人が念仏を称えつつの日々の暮らしのあり方について提示する過程を指している。この過程に含まれるのは第八章と第九章の二章であり、以下、各章の篇目と引文を中心にその構造について一瞥したい。

『選択集』第八章及び第九章の篇目は、先にも言及したように、それぞれ「念仏の行者、必ず三心を具足すべきの文」、「念仏の行者、四修の法を行用すべきの文」である。こうした篇目の掲げ方は、「念仏の行者」のなすべき義務を法然が要請しているという点で、他の十四章とは異なった趣がある。つまり、第一章と第二章を通じ、道綽・善導の引文に基づい

て正定業（選択本願念仏）へと帰納的に導かれ、さらに、第三章から第七章、あるいは、第十章から第十六章において仏辺の立場から種々に語られる選択本願念仏に帰依した「念仏の行者」が主格となつて、その立場から「三心を具足」し、「四修を行用すべき」こと、要は願往生人が念仏を称える際の心のありようや念仏を称えつつの日々の暮らしのあり方について演繹的に説き明かしたものと見えるのである。したがつてこの二つの章は明らかに機辺の立場から論じられていることが知られるのである。

まず第八章において法然は『観経』『観経疏』『往生礼讃』を引文としている。法然が善導の著作に機辺と仏辺の両者を兼ね具えた性格を見出しおられることは、既に指摘した。しかし、仏説である『観経』が、機辺の立場から語られる本章に引文として採用されているのはいかなる理由からだろうか。実は、機辺の立場から語られる全四章中、純粹に仏辺の立場である「浄土三部経」が引文に据えられているのは唯一この箇所のみである。そして、おそらくその理由は、本章私積中に法然が「『経（観経）』にはすなわち「三心を具する者は、必ず彼の国に生ず」と云う。明らかに知んぬ。三を具して必ず生ずることを得べし。『釈（往生礼讃）』にはすなわち「もし一心をも少けぬればすなわち生ずることを得ず」と云う。明らかに知んぬ。一も少けぬれば、これ更に不可なるこ

とを」（同三・一五二）と述べられている説示に見出すことができよう。ここからは、念仏行者は『観経』に説示される三心（根源的には『無量寿経』第十八念仏往生願中の「至心信樂欲生我國」に通じる）を円かに具足しなければ往生は叶わないと弥陀化身である善導が指摘され、それを受けた法然も浄土往生には三心が必要不可欠であると考えられていたことが知られる。つまり、三心はどこまでも機辺の立場で具えるべき信心ではあるものの、その必要性が仏辺によつて要請されている性格上、法然はあえてここに引文として『観経』を配されたと推測することができる。そして、だからこそ法然は、その篇目に「念仏の行者、必ず三心を具足すべきの文」と「必」の一字を付して、次章で語られる四修と明確な差別化を図っているのである。

続く第九章において法然は『往生礼讃』と基の『西方要決』を引文としている。既に第一章の解説において言及したように、基が高徳の祖師であることは言うまでもないが、法然にとつては基も凡夫の立場であることに変わりはなく、本章もまた機辺の立場から論じられていることが分かるのである。

このように第一章・第二章における帰納的と第八章・第九章における演繹的との相違こそあれ、これら四章に機辺の立場から語られるべき内容がすべて含まれていることが分かる。そして、そこで説示されている念仏行者の姿こそ、「専修念仏

の導師」（同三・一九〇）である善導が『観經疏』深心釈中に説示された信機（・信法）のありさまをその身に具現化した姿に他ならないのである。

3、仏辺の構造

本節で論じる仏辺とは、仏の側からのアプローチを指している。この仏辺に含まれるのは、第三章から第七章までと第十章から第十六章までの全十二章であり、以下、各章の篇目と引文を中心にその構造について一瞥したい。

まず『選択集』第三章は、先にも言及したように、その篇目に「弥陀如来、余行を以て往生の本願とせず、ただ念仏を以て往生の本願と爲たまえるの文」と掲げられており、本章から「浄土三部經」の『無量壽經』が引文となり（大經撮要）、あわせて弥陀化身たる善導の『観念法門』と『往生礼讚』が配され、それらに基づいて阿弥陀仏が主格となつて、念仏一行を本願として選取され、諸行を選捨された由縁が明らかにされている。

続く第四章・第五章・第六章の篇目は、後述する第十一章・第十三章と共に主格が明示されていない。しかし、それが「釈迦如来（釈尊）」であることは明白であり、仮に主格を括弧内で補つて明示すれば「釈迦如来 三輩念仏往生（を説きたまう）の文」（同三・二二三）、「釈迦如来 念仏利益（を説き

たまう）の文」（同三・一三〇）、「末法万年の後に余行ことごとく滅し、（釈迦如来）特り念仏を留むるの文」（同三・一三二）となる。いずれにしてもこれら三章は、『無量壽經』と『往生礼讚』（第五章のみ）を引文とし、釈尊が主格となつて、阿弥陀仏の本願に基づいて、念仏一行が立てられ、念仏行者が利益を蒙り、念仏一行が法滅後にも留められるのに対し、諸行が廃され、諸行を修める者が利益を蒙らず、諸行が法滅後には留められない由縁を明らかにしている。

続く第七章の篇目は「弥陀の光明、余行者を照さず、ただ念仏の行者を撰取したまうの文」（同三・一三六）であり、本章からは「浄土三部經」が『観經』となり（観經撮要）、さらに『観經疏』と『観念法門』が引文として配され、阿弥陀仏（の光明）が主格となつて、その本願に基づいて、念仏行者が光明に浴すのに対し、諸行を修める者は光明に浴さない由縁について明らかにしている。

続く第十章の篇目は「弥陀化仏の来迎、聞經の善を讚歎せず、ただ念仏の行を讚歎したまうの文」（同三・一五七）であり、引文として『観經』と『観經疏』が配され、阿弥陀仏（の化仏）が主格となつて、その本願に基づいて、念仏一行が讚歎されるのに対し、諸行が讚歎されない由縁について明らかにしている。

続く第十一章の篇目は、先の第四章・第五章・第六章と同

様、主格が明示されていない。しかし、それが「釈迦如来」であることは明白で、仮に主格を補って明示すれば「釈迦如来」雑善に約対して念仏を讃歎するの文（同三・一五九）となろう。本章でも『観無量寿経』と『観経疏』を引文とし、釈尊が主格となつて、阿弥陀仏の本願に基づいて、念仏行者を讃歎し、諸行を修める者を讃歎しない由縁を明らかにしている。

続く第十二章の篇目は「釈尊、定散の諸行を付属せず、ただ念仏を以て阿難に付属したまうの文」（同三・一六五）であり、引文として『観経』と『観経疏』が配され、釈尊が主格となつて、阿弥陀仏の本願に基づいて、念仏一行が付属され、諸行が付属されない由縁について明らかにしている。

続く第十三章の篇目は、先の第四章・第五章・第六章・第十一章と同様、主格が明示されていない。しかし、それが「釈迦如来」であることは明白で、仮に主格を補って明示すれば「（釈迦如来）念仏を以て多善根と為し、雑善を以て少善根と為すの文」（同三・一七五）となろう。本章からは「浄土三部経」が『阿弥陀経』となり（小経撮要）、さらに善導の『法事讃』が引文として配され、阿弥陀仏の本願に基づいて、釈尊が念仏一行を多善根とし、諸行を少善根とした由縁を明らかにしている。ちなみに、これまで見てきたように、『選択集』の篇目において法然が主格を明示されない場合、そのす

べてにおいて「浄土三部経」の説者たる釈尊が念頭におかれていることが分かる。逆から言えば、「浄土三部経」を引文として配し、あらためてその主格を明示しない以上、主格が釈尊となるのは自明の理である、と法然が判断されていたと推察できるのである。

続く第十四章の篇目は「六方恒沙の諸仏、余行を証誠せず、ただ念仏を証誠したまうの文」（同三・一七七）であり、六方の諸仏が主格となつて、阿弥陀仏の本願に基づいて、念仏往生を証誠され、諸行往生を証誠されなかつた由縁を明らかにしている。本章の引文は、善導の『観念法門』『往生礼讃』（二度）『観経疏』『法事讃』と法照の『五会法事讃』である。既に述べたように、法然にとつて道綽・曇鸞・迦才・基・智顛等と同じように法照もまた凡夫として位置づけられよう。そこで問題となるのが、仏辺から語られる本章において、機辺の立場となる法照の『五会法事讃』が引文として存在している理由である。実は、仏辺から語られる全十二章において、機辺の立場からの引文は、この『五会法事讃』が唯一のものである。これは、先述した第八章において、機辺の立場から語られる全四章中、純粹な仏辺からの引文として『観経』が唯一配当されているのと対極に位置づけられる。おそらくこの箇所に『五会法事讃』が配当された理由は、その引用された説示の中に見出すことができよう。すなわち、その説示と

は「万行の中に急要たり迅速なること、浄土門に過ぎたるは無し。ただ本師金口の説のみにあらず。十方の諸仏、ともに伝証す」（同三・一七九）というもので、釈尊の直説と六方諸仏の証誠に裏付けられた教法に勝る教えなどあり得ないことを強調する内容である。法然は、この法照の説示中に、仏辺の無謬性を裏付ける性格を見出され、機辺の立場で説かれる法照の『五会法事讚』ではあるものの、あえてこの位置に引文として配当されたのではないかと推測できるのである。

続く第十五章の篇目は「六方の諸仏、念仏の行者を護念したまうの文」（同三・一八〇）であり、善導の『観念法門』と『往生礼讚』を引文に配し、六方の諸仏が主格となつて、阿彌陀仏の本願に基づいて、念仏行者を護念され、諸行を修める者を護念されない由縁を明らかにしている。

最終の第十六章の篇目は「釈迦如来、阿彌陀の名号を以て、慇懃に舍利弗等に付属したまうの文」（同三・一八二）であり、『阿彌陀經』と『法事讚』を引文に配している。本章にはこれらの引文に対する直接的釈は存在しないものの、釈尊が主格となつて、念仏一行を付属し、諸行を付属しなかつたことを明らかにしている。

また第十六章の私釈の冒頭には、これまで述べてきた阿彌陀・釈迦・諸仏三仏同心になる本願念仏の多くの選択が整理されて八種選択という形式で説示されているが、この八種選択が

仏辺の立場から語られていることは言うまでもない。

以上、『選択集』の中、仏辺の立場から述べられている全十二章の篇目と引文を中心に考察してきたが、これらすべての章の説示主体が阿彌陀・釈迦・諸仏の三仏であり、第十四章における唯一の例外を除き、そこに引かれる引文が『無量寿經』『觀經』『阿彌陀經』の「浄土三部經」であり、阿彌陀化身である善導の著述であることが知られる。こうした三仏三經を信じることに、法然は次のように述べられている。

のちの信心について二つの心あり。すなはちほとけについてふかく信じ、經についてふかく信ずべきむねを釈し給へるにやと心えらるゝ也。まづほとけについて信ずといは一には阿彌陀の本願を信じ、二には釈迦の所説を信じ、三には十方恒沙の護勸を信ずべき也。經について信ずといは、一には無量寿經を信じ、二には觀經を信じ、三には阿彌陀經を信ずる也。すなはちはじめに決定してふかく阿彌陀の四十八願といへる文は、阿彌陀を信じ、又無量寿經を信ずる也。つぎに又決定してふかく釈迦の觀經といへる文は、釈迦を信じ、觀經を信ずるなり。つぎに決定してふかく阿彌陀の中といへる文は、十方諸仏を信じ、又阿彌陀經を信ずる也。

〔往生大要鈔〕昭法全六二頁

つまり、阿彌陀・釈迦・諸仏という三仏および三仏同心になる「浄土三部經」をしつかりと信じていることが、阿彌陀化身善導が深心釈中の信法において明かされた内容に他ならない

というのである。そして、そうした敬虔な姿勢の中で法然が、弥陀・釈迦・諸仏の大慈悲、あるいは、「四十八願の法王」（浄土宗聖典三・一九〇）である善導の深意を汲み、その信法の高さを普遍的に提示せんとしたそのありようこそ、本節で論じてきた仏辺の立場から論じられる全十二章の種々相といえるのである。

三、『選択集』の教理構造を成立させる根拠 ——弥陀化身善導——

このように『選択集』一部十六章の説示は、機辺の立場と仏辺の立場との二方面から捉えることができる。そこで本節では、こうした機辺と仏辺の立場を結びつけ、『選択集』の教理構造を成立させ得る根拠について検討したい。既に言及を施してはいるが、結論から言えば、その根拠とは、『選択集』第十六章で明らかにされる弥陀化身に基づく偏依善導一師論に他ならない。

冒頭にも述べたように、法然による「選択」思想の意義は、行の選び取り・選び捨ての主体を機辺から仏辺へ、つまり我々凡夫の側から弥陀・釈迦・諸仏という覚者・如来の側へと転換・昇華したことにある。このことは自宗の教義を機辺の立場から分別した上で、他宗よりも相対的に優位に立つことを目指す旧来の仏教教団の教判や教義の立て方とはまった

く異なるものであった。そして、その選択思想の出発点とも言えるものが、法然による「自身ハコレ煩惱ヲ具セル凡夫ナリトイヘリ」（『一紙小消息』昭法全四九九頁）という述懐にみられる例外的ない凡夫観である。つまり、弥陀化身であられる善導ご自身でさえ「私は愚かな凡夫である」と仰っているのだから、「私は違う」などと誰が言い切れようか、という絶対的人間観である。そして、そうした人間観から必然的に導き出されるのが、いかなる凡夫も様々な經典に説かれている教えの優劣など真に判断はなし得ないという姿勢である。唯一凡夫に許されるのは、煩惱多きこの身このままで悟りを開くことなど到底不可能であるから、「浄土三部経」に説かれる世界観にこの身をゆだね、まずは極楽浄土への往生を遂げ、そこで成仏を遂げようという判断であり、それこそ『選択集』第一章の課題である。それに対して法然は機辺の立場である道綽の聖道浄土二門判に依って解決を目指されたのである。しかし、浄土門に帰入した上でも、浄土往生の法はそれぞれ種々に論じられており、その優劣など凡夫には判断し得ない。だからこそ法然は、我々凡夫が修める行の選び取りの主体を仏の側に転換し昇華しなければならなかったのである。

ところが法然の深淵な人間観に立てば、おそらくそうした過程そのものさえも我々凡夫には真に見出し得ない。その課題を解決するためには、機辺と仏辺を結びつける鍵が必要不

可欠なのである。そこで、必然的に頼りとしなければならぬのが、煩惱多き凡夫の姿を知悉しつつも、仏の立場をも具えられた方であり、その教えである。そして、その方こそが弥陀化身善導であり、その教えこそが善導の遺文に他ならぬ。『選択集』第十六章の偏依善導一師を語る私釈において法然は次のように述べられている。

静に以れば、善導の『観経の疏』は、これ西方の指南、行者の目足なり。然ればすなわち、西方の行人、必ずすべからく珍敬すべし。中に就いて毎夜夢中に僧有つて玄義を指授す。僧は恐らくはこれ弥陀の応現ならん。爾らば謂うべし。この『疏』はこれ弥陀の伝説なりと。何にいわんや、大唐に相い伝えて云く、「善導はこれ弥陀の化身なり」と。爾らば謂うべし。またこの文はこれ弥陀の直説なりと。すでに写さんと欲する者は、一ら経法のごとくせよと云えり。この言は誠なるかな。仰いで本地を討ぬれば、四十八願の法王なり。十劫正覚の唱え、念仏に憑有り。俯して垂跡を訪えば、専修念仏の導師なり。三昧正受の語、往生に疑い無し。本迹異なりといえども、化導これ一なり。（浄土宗聖典三・一八九）

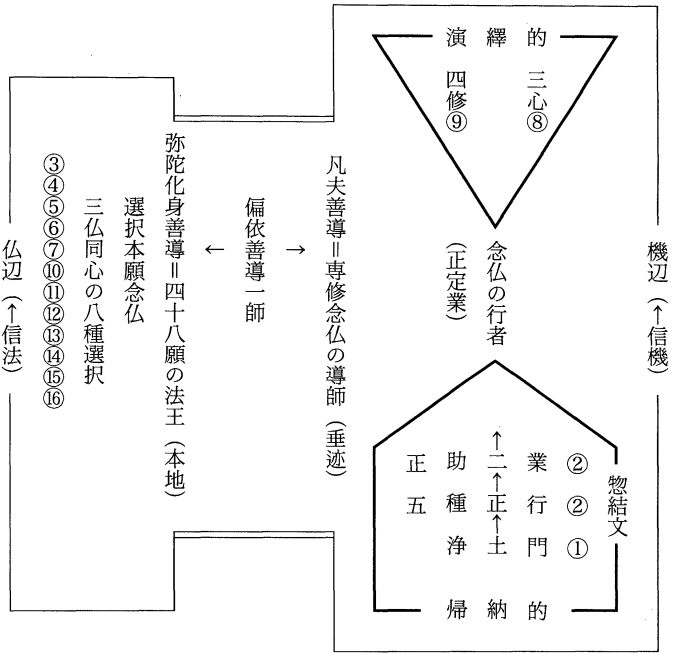
つまり、善導の『観経疏』は、凡夫善導が念仏三昧発得の境地の中で阿弥陀仏ご自身から玄義を指授されたものでありつつ、弥陀化身である善導その方の説示でもある。そして、これまで見てきたように法然は、その善導の説示を機辺と仏辺とを結びつける紐帯とも言える第二章をはじめ、機辺と仏

辺が語られるほとんどすべての章において綿密かつ周到に配している。こうした配置がなされているからこそ、『選択集』の教理構造が成立し得るのである。換言すれば、どこまでも迷妄の境地を離れることが不可能で悟りへの道程をまったく見出すことができず、ましてや仏の境界を窺い知ることなどできようはずもない私たち凡夫にとつて、「専修念仏の導師」として機辺の立場を語ることでできる「垂迹」と「四十八願の法王」として仏辺の立場を語ることでできる「本地」との両者の立場を兼ね具えた弥陀化身善導の説示以外に『選択集』で明らかにされる選択本願念仏の教理構造を構築するための抛り所とすべき教えはあろうはずがないのであり、そうした姿勢の帰結こそ、『選択集』において法然が前面に打ち出された偏依善導一師という立場に他ならないのである。

四、おわりに

機辺と仏辺、帰納と演繹を踏まえ、弥陀・釈迦・諸仏、さらには、弥陀化身善導の大いなる慈悲を汲み取られた法然が『選択集』において明らかにされた選択本願念仏の教理構造の要点は以上の通りであり、それをまとめて表したのが左図である。

【図】『選択集』の教理構造——偏依善導一師——（○の中の数字は『選択集』の章を示す。）



もちろん、法然がこうした言及をなし得たのも、自身の念仏三昧発得によって阿彌陀仏や極楽浄土のありさまを目の当たりに感じし、その実在を確信されたからであり、同時に、そうした三昧発得の体験を通じ、あるいは、二相對面を通じて信機・信法を語られた善導こそ阿彌陀仏の化身であると宗

『選択集』の構造について(林 田)

教的に確信し、その説示を仰ぎ偏依されたからに他ならない。そして、こうした確信に基づいていたからこそ法然は、「浄土三部経」の説示を根本に据え、彌陀化身善導の説示に偏依して、弥陀・釈迦・諸仏が三仏同心に「選択」された本願念仏の教理構造を明らかにし得たのである。さらに言うならば、一切経を五遍被覽され「智慧第二」と讃えられた法然だからこそこうした偉業を成し得たのであり、その教えが開花するには、法然六十六歳の『選択集』撰述を待たねばならなかったのである。

【註】(紙面の都合上、末註は最小限に留めた。)

- 1 拙稿「法然上人「三部経釈」に説かれる「選択」をめぐる」、『三康文化研究所年報』三二、同「法然上人「選択思想」と「勝劣難易二義」をめぐる」、『仏教論叢』四三、等参照。
- 2 拙稿『選択集』における善導彌陀化身の意義―選択と偏依―、『仏教文化研究』四二・四三合併、同「廬山寺蔵『選択集』における偏依善導一師をめぐる推蔽」、『仏教文化学会紀要』一〇、等参照。
- 3 もう一箇所は、『選択集』第四章において『無量寿経』の三輩が共に念仏であることを明かした最末尾に『観経』の九品もまた同意であるとして「その義下につぶさに述べるがごとし」(浄土宗聖典三・一二九)と第十二章に説示を譲っている箇所である。

(キーワード) 篇目、引文、機辺、仏辺、彌陀化身

(大正大学専任講師、浄土宗総合研究所研究員)

1. The Construction of the *Senchaku hongan nembutsu shū* (選択本願念仏集): relying solely on Shandao (善導) as our master

HAYASHIDA Kōjun

This study considers the construction of *Senchaku hongan nembutsu shū* (選択本願念仏集) from two viewpoints. The first view point is an approach from ordinary sinful people and the other is an approach from Three Buddhas (三仏) (namely, Amida Buddha, Śākyamuni Buddha and the many Buddhas of the six directions). We learn the true meaning of why Hōnen (法然) emphasized that we must rely solely on Shandao (善導) as our master.

2. On Tiantai Zhiyi's (天台智顚) Interpretation of 'true aspect' (實相) and 'practice' (修道) in his Commentaries on Passages of the *Vimalakīrti-nirdeśa*

KIMURA Shūjō

Tiantai Zhiyi thought that the inconceivable liberation which is attained in the 'Perfect Teaching' (圓教) is not realized by the severance of delusions, but the penetration into the 'Principle' (理). That 'Principle' is the 'true aspect' (實相). It is not only the 'substance' (體) of the *Vimalakīrti-nirdeśa*, but also the 'substance' of all Mahāyāna Sūtra. All sentient beings are in the inevitable consequences of the 'threefold path of cyclic *samsāra*' (惑業苦三道), because they naturally lose the 'Principle'. However, liberation is realized by understanding this 'Principle'. So the 'Principle' is the originating factor of the 'threefold path of cyclic *samsāra*', and at the same time it is the originating factor of liberation. Thus, the severance of delusions is the severance of the 'true aspect', and liberation in the 'Perfect Teaching' is realized by penetration into the 'threefold path of cyclic *samsāra*'.

3. Elucidation and Interpretation, in Understanding the Three Major Commentaries of Sui Buddhism

TAKI Eikan

The Three Major Commentaries are Sui-period commentarial works on